

成人向

Muv-Luv alternative

# Trinity Episode

TOTAL ECLIPSE fan book



for adult only



Muv-luv alternative

# Trinity Episode

TOTAL ECLIPSE fan book





自分すら騙しきれない嘘も厄介なものだが、無自覚な誤魔化しは一層厄介なものだ……篁唯依は実感を伴って深々と嘆息した。

目の前で、抑揚を感じさせない平静さを装えているとおそらくは思っているであろうクリスカ・ピャーチェノワに少し前の自身を投影すれば、嘆息は当然のものと言えた。ともあれ、どうしたものかと思う。

「タカムラ中尉？」

そう付き合があるわけでもないのに、今の彼女の表情が不安そうに見えるのは、ある点において似た者、或いは同志とも呼べるような関係だからかも知れない。

もつとも普通なら、別の呼び方があるだろう。

その別呼称を敢えて頭から振り払い、唯依は日本帝国軍士官と言うよりは国連軍ユーコン基地に務める職員としての顔で、クリスカに問うた。

「……すまない、ピャーチェノワ少尉。少し考え事をしてしまっていたようだ。それで、少尉がコチラ側にいるのは、今日も？」

「ああ。……今日もまた、イーニアがいなくなってしまう、おそらくはコチラだろうと……」

こちら、というのがどちらなのかは言うまでもないことだった。ここは国連軍関係者の寄宿舎施設。

フラフラといなくなってしまうイーニア・シエスチナを探しにクリスカがコチラ側を訪れるのは、今日が初めてではない。

もつとも宿舎の中でもイーニアのいる可能性のある場所、ひいてはクリスカが向かうべき場所は、限られている。何のことはない。唯依も同じ場所に用事があったから、二人はこうして廊下で鉢合わせてしまっているのだった。

「……」

どうしたものか、と。唯依はなるべく表に出さないよう懊悩した。そもそも勢いのままに来てしまったようなものであるからして、クリスカと会ったことで氣勢を削がれてしまった今となつてはすぐ真横にある扉を訪ねる勇氣も萎みかけていた。

そんな唯依の様子を訝しんだのか、クリスカはやや躊躇いがちなながらも口を開いた。

「……すまないタカムラ中尉、これは余計なことかも知れないが、何かあったのだろうか？ 今日の貴女は……その、少し様子がおかしいよう思える」

以前の——この基地で初めて出会った当初の彼女なら、唯依の様子がおかしかりうとも特に気にせず、例え気にしたところでそれをわざわざ尋ねるようなことはしなかつただろう。

その変化——と変化をもたらせた人物のこと——が、唯依の乙女心を悩ませるのだ。

ユウヤ・ブリッジス。

唯依の想い人。そしておそらくは、クリスカも同様の感情を抱いているであろう青年。

彼と出会って自分は変わった。クリスカも変わった。問題なのはその変化を唯依は既に自覚しているのに対して、クリスカが無自覚でいることだ。だから、別の呼び方、即ち、恋敵と呼ぶには、まだ躊躇いがあつた。

唯依の性情は日本人、殊に武家出身で帝国軍斯衛という立場上、やはり正々堂々正面からの戦いを尊ぶ面が強い。

恋愛に関しても、同様。クリスカが恋敵であるならば、彼女の自覚を促してそれから勝負に出るべき……と考えている反面、恋のイロハも知らぬ乙女としての不安もまた、強かった。

何をどうすればいいのか、一切が手探りなのだ。

ならばいっそ、敵が敵たるを自覚出来ていないうちに先手をとって攻勢に入るのも戦略としては有りなのではないかと悶々としていたところに、『悩むくらいなら、行動で示してみればいいのかよ。いっそ部屋に押し掛けてしまえば？』……と、ステラ・ブレイムルからそんなアドバイスを頂戴したのが三日前。

この三日間、悩みに悩んで悩み抜いて、ついに覚悟を決めてユウヤの部屋を訪ねてみれば、そこでばったりクリスカと鉢合わせた、というわけだ。

(これも卑怯をよしとしない神の采配……なのか)

ぐむう、つと唸りそうになるのを堪えて、唯依は改めてクリスカを見た。

綺麗な娘だ。同性ながら、素直にそう思う。

白い肌も整った顔立ちも、まるで人形か、もしくは北の大地に宿る妖精のようでさえあるのに、成熟した身体は肉体としての生々しさをこれでもかと思わせて、彼女が現実の存在であるのだとはつきり主張していた。

ユウヤとの関係も良好だと、最近各所から聞こえてくる。以前は突っ慳貪だったクリスカが、いつの頃からかイーニアを捜す際に一緒に捜してくれるようユウヤに協力を求めるようになった。

自然、二人で一緒にいる姿がよく目撃されるようになり、となれば常に娯楽に飢えている基地のこと、『唯依姫に恋敵出現！』『スカーレットツインの二人、トップガンに撃墜さる！』などといった噂がまことしやかに囁かれるようになっていった。

おそらく、知らないのは当のクリスカとユウヤくらいだ。

……しかし、実際のところ、どうなのだろう。

唯依は、クリスカは自身の内なる想いに無自覚であると推察していた。だが、ユウヤの方は超のつく鈍感野郎なのでこの際放っておくとして、クリスカはいつたどこまで自分の想いに無自覚なのだろう。

自分がそうだったように、ある日ふと自覚し全てを理解するか、それとも、日々を共に過ごすうちに徐々に理解していくのか。

ゾクリ、と。不安に打ち震えて唯依はクリスカの透き通るような瞳を覗き込んだ。

そこから読み取れるものは、何も無かった。

唯依の挙動不審に小首を傾げながら、クリスカはユウヤの部屋の扉をチラチラと何度も横目に見ていた。

気になる。

ではどうして気になるのか。それはイーニアが——自分にとって唯一無二の大切な少女が——中にいるかも知れないからだとか、クリスカはそう考えていた。……否、考えるようにしていた。

決してユウヤのことが気になるわけではない。もしも中にイーニアがいなかった場合、彼がその行方を知っているか、または一

緒に少女を捜してくれるかは、気になる。けれどそれだけだ。それだけのはずなのだ。

(ユウヤ……ブリッジス個人のことが気になっていいるわけでは、無い)

そう否定し、クリスカは扉へと向き直った。

途端、動悸が激しくなったのを自己管理に余念無いクリスカは鋭く察知し、僅かに眉を顰めた。

いったいいつ頃からこうなってしまったのか。ただユウヤの部屋を訪ねる、彼の声を聞き、顔を見、隣を歩くだけで動悸は激しくなり、鼓動は早まり、妙に熱っぽくなって頬が紅潮してしまう。怪現象だ。

肉体的な病ではない。日々の検査では異常は発見されていないし、体調は一切悪くないのだ。

ではおかしいのはどうしてなのか。以前ユウヤ自身にその事について尋ねた時、彼は自分達がライバルであるから、それ故に相手の言動が、存在が気に懸かり今のような状態に陥ってしまうのだと言った。その時はなるほどと少なからず納得もしたものだ。以来彼と過ごす時を重ねる毎に『何か違うのではないか?』という疑問がクリスカの中で次第に大きくなっていった。

なるほど、ユウヤは優秀なパイロットだ。99型砲や不知火型の性能を抜きにしても、十分にライバル視すべき技量を備えている。祖国のため、軍や党のため常に最優であろうとするクリスカにとって、無視できるような存在でないことは確かなのだ。

だが、やはり……違う。

自分も、それにイーニアも。ユウヤがテストパイロットとして

ライバル視すべき相手だから気になっていいるのではない。彼という人間の、“なにか”に惹かれている。

「……っ」

そう考えた瞬間、頬の熱が増した。

心拍数がまた上がっている。常態に戻すべくクリスカは深呼吸をしようとして、

「……ケホッ!?」

咽せた。

「ビャーチェノワ少尉、大丈夫か?」

心配そうに覗き込んできた唯依に『も、申し訳ない、タカムラ中尉』と詫びつつ、クリスカは混乱する頭でもう一度ユウヤのことを考えた。

それにわからないと言えば、最近のイーニアの行動の事もだ。フラフラと何処かへ行ってしまふ、所謂彼女の放浪癖に関してはまだいい。不安だし心配もするからこうして捜しに来るわけだが、既に受け入れていた。

わからないのは、彼女がいつも必ず自分とユウヤを引き合わせようとするかのように行動しているように思えることだ。

例えば、最近のイーニアは居なくなると数回に一度の確率でユウヤの部屋にお邪魔している。そのため、クリスカはまず最初にユウヤの部屋を訪ねるようにしているわけだが、毎回そこにいるわけでもないで結局はユウヤと一緒にイーニアを探し回るようになる。その頻度がどうも計算されているような気がするのには果たして深読みの上すぎだろうか。クリスカは顎に手をあてた。

イーニアのことがわからないとどうしようもなく不安になる。

なのにこの件に関しては、彼女のことよりもユウヤの方が気に懸

かっってしまうことがクリスカにさらなる混乱をもたらしていた。

「少尉、もし具合が悪いのなら医務室へ案内するが」

自分でも気付かぬうちに相当難しい顔をしていたらしく、クリスカは唯依からそう話しかけられて漸く我に振り返りを振った。

「い、いや、大丈夫だ。……その、中尉、本当に申し訳ない。私は、どうやら少しおかしいらしい」

認めるしかなかった。原因はわからずともおかしなのは紛れもない事実なのだ。

やや肩を落とし、申し訳なさそうにクリスカは踵を返した。

「どうした？」

「……今日は、一人でイーニアを捜そうと思う」

突然のことに、唯依は驚いているようだった。

「だが、まだユウ——ブリッジスの部屋にいるかどうか確認していないのでは？」

「……その通りだ。でも、今日はイーニアはそこにはいないような気がする」

根拠、という程でもないが、前はイーニアはユウヤの部屋にいた。ならば、もしクリスカの考えた通りであった場合、今日はイーニアは別の場所にいるはずなのだ。

「いや、しかし——」

「いいんだっ」

思った以上に大きな声をあげ、一番驚いたのは他ならぬクリスカ自身だった。他国の軍人とは言え階級が上である唯依を相手にこの態度は流石に問題がある。

「あつ、い、いや、今のは——」

咄嗟に謝罪しようとし、けれど今すぐにもこの場を立ち去ら

なければと逡巡したクリスカは足を連れさせ——

「おい、まったくお前らさつきから人の部屋の前でいったい何を騒いで……え？」

——ドアを開けて、不貞不貞しく顔を出したユウヤの胸へと、スッポリと収まっていた。

一瞬、完全に思考が停止していた。

アキシデントであることは、見ただけでわかった。

そもそもそう至るまでの経緯を全て知っているのだから、所謂勘違いが生じる余地など無い。

理解している。理性で、理論的に。

思考力が回復する。

自分は冷静で、平静なのだと言いつ聞かせる。呼吸脈拍ともに異常はなく、全て安定している。大丈夫だ。

そう、大丈夫。

大丈夫に、決まっている……のに。

「……あつ」

唯依は、自分が今少しでも気を抜けば泣き出してしまいかねない状態にあることを、悲しいまでの聡明さと自己認識力によって悟ってしまった。

ユウヤが悪いわけでも、クリスカが悪いわけでもない。たまたま偶然と偶然が重なり合って二人は抱き合うかのような形になっただけだ。

なのにどうして、こんなにも痛むのか。

どんなに強がっていても、毅然とし、帝国斯衛の衛士たる規範に倣い日々己を律していたとしても、唯依のその部分はどうしてもなく少女だった。

(いや、違う。これは……違うんだから、大丈夫)

鬱屈とした感情を、それでも自制しようと唯依は努めた。

この程度のことでも心乱すような無様を晒すわけにはいかないのだ。篁家の娘として、絶対に。

……しかし、その絶対が脆くも崩れ去る。

「ブリッ……ジス、……あ」

熱を帯びた眩き。紅潮した頬に、潤んだ瞳。

唯依はユウヤに抱きとめられた状態のクリスカに、あまりに純粹で真っ白な彼女の恋心を、視た。

綺麗だった。

あまりにも綺麗すぎて、唯依はまったく唐突に今すぐこの場から立ち去らなければというわけのわからない感情に襲われた。

明確な理由など無い。ただ、自分がここにいてはいけない、邪魔者のように感じられてしまったのだ。

自身の不明にもっとも困惑していたのは唯依本人であり、けれど解決の糸口を掴む事など出来ぬままに駆け出してしまっていた。

「唯依？ ……って、おい、ちよっ！」

今この場において最も状況を理解出来ずにいたのは、間違いないユウヤだった。

何せ、自室で身体を休めていたところ廊下から聞き覚えのある声が聞こえてきたので何事かと思いい顔を覗き出してみれば、突然クリスカがもたれ掛かってきて、それを見た唯依が逃げるように走り出してしま……意味不明もいいところだ。

なのでユウヤにはまともに思考する時間すらなかった。

抱きとめたクリスカ、逃げる唯依。

わからない。何一つとしてわからない。

だがわからないまでも、唯依をこのまま逃がしてはいけないと、頭のどこかでそんな警鐘が鳴らされていた。

「ッ！ ああっ、まっ、待てよ！」

突き動かされるままに、ユウヤは唯依を追って走り出していた。そうしなければ取り返しをつかえないことになる、そんな予感があった。

「唯依！」

自分の名を呼ぶ声に逆らうようにして、唯依は走っていた。追いつかれ、彼に捕まってしまったなら、自分は何を叫び出すかわかったものではない。だから唯依は必死に逃げた。

「待てよ！ おい、待てよ！」

激しさを増す動悸、息苦しさに喘ぎながら、唯依は縋れそうになる足を無理矢理に動かして逃げ続けた。

「唯依っ！」

ユウヤの声を聞いているのが辛かった。呼んで欲しくなかった。今は彼の顔を見たくなかった。



だから、決して振り返らないようにしていたのに。

「唯依い！」

ビクリと心が跳ねた。

反射的に首が回ってしまふ。肩越しに、唯依は自分を追いかけ  
てくるユウヤを見て――

「ッ！」

彼が一人ではなかったことで、さらにがむしやらに逃げた。

驚いたのはクリスカだ。

「……あつ」

右手に微かな痛みと温かさを感じながら、走っていた。

宿舎の廊下を、手を引かれて。

「ブ、ブリッジス!?」

何もかもあまりに突然のことで、ユウヤは自分でも気付かない  
内にクリスカの右手を握り締めたまま走り出していったのだ。

クリスカもまた他の二人に漏れず大いに困惑し、混乱していた。

原因不明の感情の乱れによりユウヤの部屋の前から立ち去ろう  
とした事も、その後足を縫いさせ危うく転倒しそうになったとこ  
ろで偶然部屋から出てきたユウヤに抱きとめられたことも、いき  
なり唯依が走り出していったことも、それをユウヤが自分の手を  
引いて追いかけていることも。

（私は……それにユウヤ――ブリッジスも、タカムラ中尉も、何  
がどうなっているんだ？）

自分一人だけでも足を止めようと思えば止められるはずだっ

た。なのにそうしないのは、ユウヤの必死さが握られた手を通じ  
て流れ込んでくるかのような感覚に囚われたためだ。

そう、ユウヤは必死だった。

必死に唯依を追いかけていた。

（……あつ）

そう考えると、心身を蝕む異常が加速したようにクリスカには  
感じられた。

手を力強く握られているからとは別の理由で痛むのだ。

軋み、悲鳴をあげている。

「……ブリッジス」

呟きはユウヤの耳には届いていないようだった。果たしてそれ  
は幸いだったのか。

（イーニア、私は……私はッ）

どうすればいいの？ と。庇護すべき対象であるはずの少女に、  
クリスカは問い、縋りたくて仕方がなかった。

彼女はわかっていたのだろうか。わかっている、自分とユウヤ  
とを引き合わせ続けていたのだろうか。

わからない。胸が苦しい。締めつけられるかのようだ。

「唯依！」

ユウヤが唯依の名を叫んで、残ったもう片方の手を虚空に伸ば  
す。唯依もかなりの健脚だったが、制服でいたためか靴もヒール  
が高く、いつ転んでもおかしくないくらいに不安定な逃走だった。

「待てよ！ おい、待てっ！」

早まる鼓動、眩暈を堪えながら、クリスカはユウヤの手を心細  
げに握り返した。

「唯依っ！」

彼が彼女の名を呼ぶたびに、こめかみのあたりに鈍痛が走った。ユウヤの声に心がざわめいた。

呼んで欲しくなかった。その理由を考えようとすると目の端が熱くなった。

「唯依い！」

ビクリと心が震えた。

ユウヤの手をさらに強く握り締め、クリスカはこの場で立ち止まってしまうたかった。

「ッ！」

なのに、懸命に唯依を追う彼を止めることは、どうしても出来なかった。

「うおおおおっ！」

「うおおおおっ！」

ようやく手と手が触れ合いそうになった距離から、ユウヤは一気にラストスパートで詰めた。

指先が掠める。

そこからは、あつという間だった。

「掴まえたあ！」

「きやつ!?」

唯依の手を掴まえ、ユウヤはそのまま強引に自分のもとへと手繰り寄せた。

クルリと、ダンスでも踊るかのように半回転した唯依の身体がユウヤの胸元に収まる。

押しつけられた胸に耳をあて、唯依は顔中を真っ赤にしていた。ユウヤの心臓の音は早鐘のようだった。

「……はあ、はあ。ひ、人が休んでたところを、ぜ、全力疾走させやがって……ったく！ 何なんだ!？」

怒鳴られて、唯依は恐る恐る顔を上げた。普段の彼女からはかけ離れた、まるで幼子のような仕草にユウヤは続く言葉を詰まらせた。

「ゆ、唯依？」

唯依の目尻には、輝く雫があった。

ユウヤと、そしてクリスカはその雫の輝きに戸惑い、呆然とその場に立ち尽くした。

「う、うう……」

人前で涙を見せるなど、らしくないし、あつてはならないことだ。唯依はそう自分に言い聞かせ、なんとか耐えようとした。なのに我慢すればする程目尻の雫は玉のように大きくなっていき、やがて、こぼれ落ちた。

「……ユウ、ヤ……ユウヤあ……っ」

「お、おいっ」

ユウヤの胸に縫りつき、唯依は泣いていた。その姿は年相応の少女のようで、困惑しつつもユウヤは握り締めた手にギュッと力を込めた。

そんな二人の様子を、クリスカは辛そうに見つめていた。

「落ち着いたか？」

「う……う、ん」

ユウヤの部屋で、彼のベッドに腰掛け、唯依は様々な羞恥で赤々と茹だつた顔をコクリと下げた。

あれから——騒ぎを聞きつけた者達が自室から顔を覗かせ始めたのをマズイと感じたユウヤは、泣き続ける唯依と生気の抜けたようなクリスカの手を引き、またもや全力疾走して自分の部屋下と戻ってきたのだった。

そうして唯依が泣き止むのを待つこと数分。

致命的なまでに鈍い頭を振り絞り、ユウヤは今回の一件が果たして何事であったのかを考えていた。まさか、この期に及んで自分が無関係だなどとは流石に言えるわけもない。

唯依とクリスカが、自分の部屋の前で何事か話していて、何を騒いでいるのかと扉を開けた時にクリスカがもたれ掛かってきて、それを見た唯依が逃げ出して、思わず追いかけて掴まえたら……泣かれてしまった。

そう、泣かれて——いや、泣かせてしまったのだ。

（……どうすりゃいいんだ、これ）

気まずい。

部屋の空気は最悪だった。

唯依と、そしてクリスカも、無言だった。特にクリスカは部屋に入ってから以来どこかに座るでもなく突っ立ったまま深々と俯いて

いた。その様子からは怒っているのか悲しんでいるのかも読み取れはしなかった。

女を泣かせたのは初めてではない。けれどその事に対しなんら心も痛めず平然としていられるような、ユウヤは情の薄い男ではなかった。鈍感な鈍感なりに、女性に誠意を尽くそうという意思は当たり前にあるのだ。

それに……

（唯依とクリスカ、か）

二人とも、意識せずにはいられない相手であることは確かなのだ。その意味合いが、ユウヤにとって男女間の安易な色恋にしたくないという無意識の願望が込められていたため敢えて意識せずにはいたところを、今回のこれで考え直させられてしまった。

悩み、迷うのは、二人に対する想いの深さのためだ。ユウヤ自身の自己分析はどうあれ、そういった部分の根底には日本人的な一本気さなどが見え隠れしている。

沈黙が室内を支配していた。やがてその沈黙が耐えきれぬ重みに感じられ始めた頃、最初に口を開いたのは、三人の中でもっとも寡黙であろうクリスカだった。

「……ブリッジス、タカムラ中尉」

「ん？」

「私は、もう行こうと思う。……イーニアを、探さなければならぬんだ」

半分は嘘だった。

イーニアの思惑が自分とユウヤとを引き合わせる事にあるなら、おそらくは今頃安全なルートをのんびりと散歩しつつ、ニコニコと微笑みさえ浮かべているはずなのだ。その事が余計に、ク

リスカを居たたまれない気持ちにさせていた。

「あ、おいクリスカ、オレも——」

「いや、いい……!」

語気がやや荒くなってしまったことに一番驚いていたのは、他ならぬクリスカ自身だった。だがそれでも、もうこの場にはいられないし、いたくはない……そんな正体不明の感情に突き動かされるままクリスカは部屋の入口まで足早に移動し、

「……待ってくれ。ビャーチエノワ少尉」

「ッ!？」

いつの間にか音もなく近寄っていた唯依に、手首を掴まれていた。咄嗟のあまり振り解くこともかなわず、クリスカは怯えた子供のような顔で唯依へと振り返っていた。

「タカムラ……中尉、……わ、私は……イーニアを——」

「待って欲しい」

泣き腫らした後のものらしく赤く充血した唯依の瞳は、何かの覚悟を決めたものであるかのようにクリスカには感じられた。わけもわからず逃げだそうとした自分とは大違いだ。

そう、逃げようとしたのだ。

あのまま気持ちの正体を探ろうと向き合ってしまったら、良くないことが起こりそうな予感がして……クリスカは、そんな言い訳を懸命に探していた。

「すまない。だが……どうしても、ハッキリさせておきたいことがあって……これは、私のどうしようもない我が儘で……身勝手です。……うん」

スウツと、唯依が大きく息を吸った。

緊張した空気に、クリスカも、それにユウヤも身を硬くしてい

た。まばたきすら忘れて、二人は唯依の言葉を待った。

息を吸って吐く、ただそれだけの時間が長く、とても永く感じられて——

唯依は言葉にする。

自分の中でずっと渦巻いていた想いを。心を賭して、ただ伝えんがために、振り絞って。

「私は……ユウヤが、ユウヤ・ブリッジスのことが……す、好き、……だっ」

言った。

心臓が今にも爆ぜてしまいそうだったのは、告白した唯依だけではなかった。ユウヤも、クリスカも、激しさを増す動悸を抑える術など知らず、自らの鼓動に揺らされながら空っぽの頭を振るい、考えた。

何を考えればいいのかわからないのに考えた。

数秒後、それはようやく『自分は、どうすればいいのか。何を言えばいいのか』という問題を明確にし、既に決まっているはずの答えを七面倒臭く導き出すにはさらに数瞬を要した。

待つまでの時間は唯依の命ごと揺さぶっていた。初恋のエネルギーは、告白へと用いられたそれは彼女の人生の中で間違いなく

最大級の爆発力と衝撃を秘めており、全てを使い果たした唯依に防御などという選択肢は残っていなかった。

待つまでの時間に揺さぶられていたのは、クリスカもまた同じだった。彼女はまだ知らない。自分がユウヤに向ける想いが何であるのか、潜在的には理解しつつも言葉には出来ずにいた。

言葉にしてしまうのが、怖かった。

今この状況でユウヤがどう答えるのかを考えれば、クリスカは

自分の想いをある一つの言葉に置き換えるなど出来るはずもなく、ようやく動きを取り戻した身体は再び部屋の入口へと向かい逃げるように退室しようとした。

なのに、

「待って……！」

唯依は、手を放してはくれなかった。

自分は残酷で傲慢な女なのかも知れないと自覚しつつ、唯依はクリスカにもこの場において欲しかった。彼女にも、自分の気持ちを爆発させて欲しかった。

「……う、あつ」

まるで心細くて泣いている幼子のように、今のクリスカは小さく感じられた。普段の毅然とした彼女が嘘のようだ。けれどこれこそが本来の少女としてのクリスカ・ビャーチエノワなのだろうと、身勝手に、唯依は彼女を自分と、そしてユウヤへと向き直させた。

「わ、私……私ほつ」

イーニアがいない。隣に、イーニアがいないことで、クリスカは否応もなく個人としての自分と向き合いながら、ユウヤと唯依を正面に見つめることとなった。

イーニアが自分に何を望んでいたのか、どうして欲しかったのか、何となくだがわかったような気がした。

彼女を守っているつもりで、守られていたのは自分だった、依存していたのは自分だったのではないかと思い、悩み、苦しみ、喘ぎながら、クリスカは震える手を伸ばした。唯依はそれを阻害しない。むしろ見守るように、掴んでいた手を添えて、クリスカの動きに任せていた。

「……私、は……ッ」

伸ばした手が、ユウヤの胸に触れていた。

クリスカの目尻から、涙が散った。

ユウヤは温かかった。唯依も温かかった。イーニアに触れている時と同じように、二人の体温はクリスカを癒し、落ち着かせた。傾いていく。

心も、身体も。

「……私、も」

ユウヤの胸に身体を預け、クリスカは、ようやく告げる。

その告白はユウヤにだけ向けられたものではない。他ならぬ自分自身に告げるべく、クリスカは桜色の唇を微かに動かしていた。

「私も、……お前が……ブリッジスの……ユウヤ・ブリッジスのことが……好、き」

言葉にしたことが自分で信じられないとでも言いたげに、クリスカは瞠目し、わなわなと口を押さえていた。

でも、それはどうしようもなく本当のことで。

「……あつ」

力付けるかのように、唯依はクリスカの肩を抱いて、二人の身体はそのままユウヤを押し倒していた。



二人の女から同時に告白された——しかもそれがどちらも絶世の美女だというのだから、男なら誰もが羨むシチュエーションな

のではないかと客観的には思わなくもない。が、そこで上手に立ち回れるような男かと言えば、ユウヤは鈍感な上に不器用で、我が侷で強引ながらも人並には誠実な、つまりは大切な女性二人にその場限りの対応が出来る類の人間ではなかった。

「……その、なんだ。二人とも」

嬉しくないのか、と問われれば嬉しい。

自分は、間違いなくこの二人に惹かれている。胸に感じる彼女達の温度によって、それはさらに浮き彫りにされつつあった。

「二人の気持ちは、……驚いたけど、凄く、嬉しい」

(でも、そんなんじゃない駄目だろ?)

好き、だ。

多分、いやきつと、間違いなく——ユウヤ・ブリッジスは、篁唯依とクリスカ・ビヤーチェノワの二人を好きなのだ、そう思う。思えるだけの熱さが、胸の内にある。

だが駄目だ。それだけではまだ駄目だ。

どちらをより好きなのか、選ぶのか、本来ならそう考えるべきなのに、二人の温かさ、鼻腔をくすぐる甘い香りがユウヤの前に新たな選択肢を浮かばせ、決断を迫っていた。

自己防衛などかなぐり捨てて、常識にも倫理にも囚われずに自分は彼女達をどう想っているのか、どうしたいのか。

踏ん切りがつかないのは弱さ、なのだろうか。

「オレは……オレは——むうッ!?」

果たしてこんな時、強いのは男よりもやはり女なのだろう。

唇を塞がれながら、ユウヤは『わかってはいるから』とでも言いたげな唯依と、そしてまだ躊躇いがちながらもどこか必死さを感じさせるクリスカの眼差しに、圧倒されていた。

(……ああ、ダメだ。オレ)

選べないのか、選びたくないのか。そんなことどうでもよくなるくらい二人からの口付けは情熱的で。

ユウヤは、唯依とクリスカ、二人の背に同時に腕を回していた。

「あっ」

「ふ、む……んっ」

加速していく。

もう、止まらない。三人とも。

溢れる想いのままに、三人は心と体を重ねていった。





はあ……  
れる、んふう

ちゅ……んむ  
はまじ

んう……  
あむこ、こうか

ブリッジスのコレは……  
とても、フフ 正しいな



はあ……これが  
ユウヤの味なのか

私達のせいで  
こ、こうなって  
いる……のか?



はむ……ん  
ちゅふ

んちゅ……  
れる んは……あ

ん……  
ふああ



唯依ッ……  
く、クリスカッ



んう……

ちゅぽ

は……あふ

ん……はむ  
んちゅ……う



ん 喜んでくれているなら  
何よりだ♥



な、何か失敗したか……？

はあ

はあ

いや……折角だからさ  
その大きな胸でしてくれないか？

ブルブル

はあ

んああ？



ん……これで、いいのわ?

あ、ああ……凄くいいかんじだ  
そのまま色々してみてくれよ

そうだな  
胸で上下に擦ったり  
舌を這わせたり

わかったん……  
こんなものでどうだ?

色々って……  
具体的に言って欲しい

ズニツツ  
ズニツツ

ズニツツ

ニユ

ニユニユ

タツ

ズニツツ

ぴち

ズニツツ

グニ

レニ

ムニ

ぴち

ほ

ほ

おおお……これは  
かなり……ヤバツ……





フ……いいのかわ  
私の胸が

ほ。

うあ……  
スゲエ乳圧ッ……ッ



こうすれば  
いいんだらう？

グニイ

ムニッ



クツ 流石に俺ばっかり  
やられるわけにも……

ムニイ

モミ

モミ

ムニイ

ムニイ

クツ

グニッ



ぎ……ひいあああ  
あああああ ♡

その貌……  
最高にエロいぜ  
クリスカ



いかないぜつ

ムニッ

グニッ



く……あああつ  
乳首……擦れて……え♥

はあう

ふう

グ



わ、私だって……!

うあ



うお……も、もう……  
くあああツ

ビュッ

ビュッ

グ

んあつ





は 早く  
挿入れてくれ

ココが……  
もう……



初めてはお前に  
捧げたい……

私も……



コウヤッ



こうなったら二人まとめて  
相手してやるぜ

しゅ

フ



はあ

はっは

はあ……ユウヤ

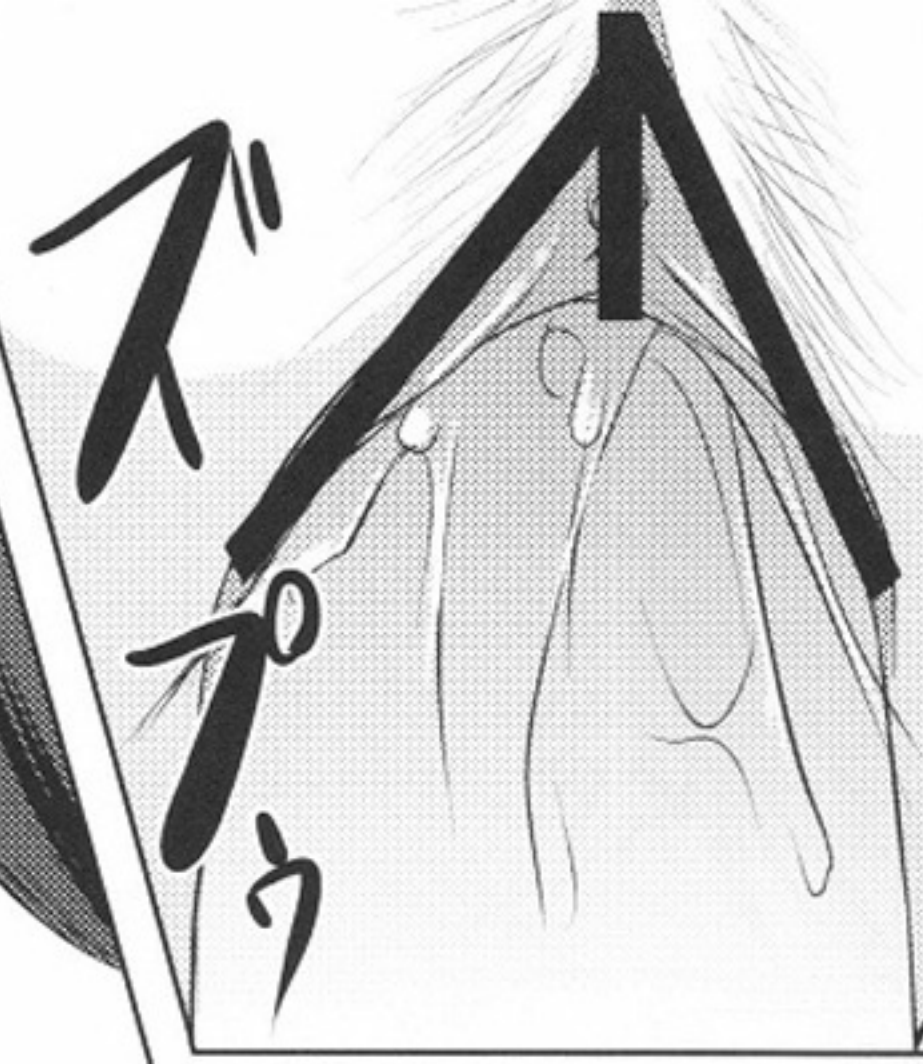
んう……っ  
はあ れろ、んちゅ♡

はむ……

んんんんん  
あたまがあ

あはっ  
ユウヤ

スッ









あはあ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

んんん

ビクッ

ビクッ

くエピソードく

「しっかしねエ」

フェンスに背を預けながら、ヴァレリオはニヤニヤと堪えきれないとばかりに笑みを漏らしていた。

「こりや賭けは誰の勝ちになるんだろうなア」

「それは……誰だろう？」

ヴィンセントも、親友の今の姿には苦笑せざるをえなかった。

色々と複雑且つ厄介な事になるだろうとは踏んでいたのだが、

まさかこんな決着を見るとは思ってもみなかったのだ。

二人の視線の先では、ハンガー脇の通りを一人の青年と、三人の少女が連れ立って歩いていった。

ユウヤと唯依、それに、クリスカと、イーニア。

四者四様、表情はそれぞれだ。

今までになく落ち着き払った様子ユウヤに、気恥ずかしそうに頬を染めながら彼の三步後ろを歩いている唯依。クリスカはやや難しい顔をしながらも同じく頬を染めてチラチラとユウヤを見つつ、隣を嬉しそうに歩いているイーニアと仲睦まじげに手を繋いでいた。

「……姫に賭けてたんだけどなあ」

「まさかトップガン様とは言え、唯依姫と紅スカーレットトッピンの姉妹を同時に撃墜しちまうなんてなア。誰も読めやしねエよ」

ニヒヒツと笑ったヴァレリオは、顎をしゃくってユウヤ達のさうらに後方を指し示した。そこにはジャケットの裾を噛んで悔しそうに唸っている亦菲イイフェイと、彼女をからかいながらどこか自分も不

機嫌そうなタリサがいつも通りの騒がしさを見せていた。

「でも、いいんじゃない？」

いつの間にか二人の横に立っていたステラが、なんとも感慨深げに言って穏やかに微笑んでいた。

「四人とも、幸せそうだよ」

「……ま、確かにこんな平和なオチなら、な」

賭けに負けたのは悔しいけどよ、と続けたヴァレリオに同意し、ヴィンセントも親友の幸福を祝福するように目を閉じた。

イーニアのものだろう、笑い声が空へと吸い込まれていく。

アラスカの空はどこまでも蒼く。

この平和がいつまでも続けばいいのにと、誰もがそう願わずにはいらなかった。

END

Muv-Luv alternative

# Trinity Episode

TOTAL ECLIPSE fan book

締め切り 30秒前です。  
落としそうです……おと……  
デキタァァァァァァァァァァァァ

寒天



唯依姫とクリスカの美尻、  
マジ癒される。  
ヤバイね。

忌呪

Muv-Luv alternative

# Trinity Episode

TOTAL ECLIPSE fan book

- 発行： 黒色彗星帝国  
寒天示現流
- 著者： 忌呪  
寒天
- 印刷： 同人誌印刷くりえい社様
- Web： 黒色彗星帝国  
<http://imi.ju.jp/>  
寒天示現流  
<http://kantenjigenryu.web.fc2.com/>

18歳未満の購入、無断転載、複製、  
Web上へのアップロード等を禁じます。  
ダメ、絶対。

2009/04/26 初版



黑色彗星帝国

寒天示現流